

# しいのき



上：当館蔵 明治神宮奉賛会1932・36『聖徳記念  
絵画館壁画集』より

左：旧山崎邸「しいのき」中野区指定記念物

## 明治150年と中野

館長 比田井 克仁

平成30年（2018）は、明治元年150年にあたる年です。総務省を主体として「明治の歩みを、つなぐ、つたえる」をテーマとした講演会・展示が全国各地で開催されています。当館でも、企画講座「幕末明治の地域を探る」をはじめとして企画展・館蔵品展を5回開催し、この150年を迎えます。

ところで、中野が明治150年に何かゆかりがあるのか、疑問に思われる方も多いと思います。ここではそのうちの二つの話題について紹介してみたいと思います。

右上の写真は、有名な、慶応四年（1868）3月13日の西郷隆盛・勝海舟会談の図です。この会談に先立つ、3月9日、駿河に駐留していた西郷のもとに幕臣山岡鉄舟が「朝敵徳川慶喜家来、山岡鉄舟まかり通る」と大音声で堂々と西郷と面会し、勝の会談の下ごしらえをしたことはよく知られています。維新後、西郷に請われて明治天皇の侍従として務め、中野区内小淀（現東中野一丁目）に居を構えました。

その跡地には鉄舟の諱である高歩（たかゆき）にちなんだ曹洞宗「高歩院」が建てられています。

左上の写真は、歴史民俗資料館にそびえ立つ「しいのき」です。勝海舟・山岡鉄舟の根回しもむなしく5月15日、新政府軍と旧幕臣の「彰義隊」は上野で衝突しました。「上野戦争」です。「彰義隊」の敗残兵は、命からがら中野に逃れてきました。「しいのき」のたもとにたどり着いた兵隊たちは、山崎家の厚い手当を受けたと伝えられています。遠く150年前のほんの一時の出来事を「しいのき」は覚えているのでしょうか？話ができれば、聞いてみたいところです。

# 文化財よもやま話

## 幻のオリンピックと<sup>さぎのみや</sup>鷺宮

2020年には、東京都でオリンピック・パラリンピックが開催されます。1964年に続き2回目ですが、1940（昭和15）年、戦争の拡大で中止された幻のオリンピックがありました。そのメイン競技場に鷺宮が立候補していたのです。

今年7月10日から8月10日までのコーナー展「東京オリンピック1964」では、幻のオリンピックと鷺宮の関係について特集しました。

メイン競技場には、代々木、芝浦埋め立て地、駒沢ゴルフ場跡地、上高井戸、杉並（和田堀）、井荻、砧、鷺宮、神宮外苑の9つが名乗りをあげました。

鷺宮が立候補した経緯は定かではありませんが、38万5千坪という広大な敷地を有していたことが理由ではないかと考えられます。しかし交通の不便さが敬遠されたのか、結果は駒沢ゴルフ場跡地と神宮外苑に決定しました。神宮外苑は国立競技場として1964年のオリンピックではメイン会場、駒沢競技場は第2会場として利用されました。

幻のオリンピックを唯一示すのは、港区芝浦の「<sup>ごしきばし</sup>五色橋」で、自転車競技会場の芝浦9号埋立地へ行くための橋でした。現在の橋は1962（昭和37）年2月完成なので、1964年のオリンピックのために架けられた橋と誤解されますが、初代の橋は、すでに戦前からあったそうです。（北河）



「東京オリンピック1964」の鷺宮特集の様子

# 大地に眠る歴史

## 中野区の遺跡（16）

今回取り上げるのは、旧中野富士見中学校の跡地で見つかった珍しい資料です。この場所はNo.85遺跡と呼ばれる遺跡ですが、2014年に発掘が行われ、主に江戸時代以降の比較的新しい時代の遺構や遺物が見つかりました。その中でも興味深いのがオランダで製作された陶器の破片です。



ペトルス・レゲー社製陶器の破片（左：内面 右：外面）

No.85遺跡では、調査区域を長方形に取り巻くように、長い溝が10本以上、ほとんど同じ位置に何度も掘り直されているのが見つかりました。溝から見つかる遺物は江戸時代以降のものがほとんどで、近代のものも含まれます。最初に掘られた3号溝の中の土には、宝永4年（1707）の富士山の噴火由来する火山灰が含まれており、出土遺物と合わせて考えると、溝は300年以上ほとんど同じ場所にあったようです。

形状や中の土の様子を見ると、この溝は何か具体的な用途があったというより、場所の区画自体が目的のもののように見えます。明治初年の地図や昭和初めの航空写真では、遺跡のある場所は畑地で、その南が屋敷地になっています。畑地と屋敷地を区切るためのものだったのではないのでしょうか？

溝の外の屋敷地側にはゴミ穴が見つかり、幕末および明治・大正の遺物が大量に出土しましたが、これらは屋敷地に関係するものだと思います。

問題の遺物はこのゴミ穴から見つかったもので、ペトルス・レゲー社というオランダの製陶会社によって作られた鉢の破片です。オランダは江戸時代ヨーロッパ諸国の中で唯一外交関係を許された国でしたが、一般の貿易が許されるようになったのは幕末の開国以降のことです。No.85遺跡で見つかった鉢も、この機会に応じてペトルス・レゲー社が日本に輸出したものと考えられます。1859年に同社の商船が日本向けに出航した記録がありますが、それ以降は遅くとも1882年までに日本への輸出は終わってしまうようです。非常に短期間しか輸入されなかった希少な品物ですが、このような品を保有していた屋敷の主は地域においても有力な者だったと考えられます。（舟木）

# 平成30年度 中野区登録文化財 刊本『そよふく風』（9点）

（中野区登録文化財：登録指定第121号）

平成30年度登録文化財について、中野区教育委員会は、中野区文化財保護審議会の審議検討を経て、歴史民俗資料館所蔵資料の中から『そよふく風』9点を、平成30年5月25日付けで中野区登録有形文化財に登録しましたので紹介します。

## 【『そよふく風』第1号～第9号】

### ■発行所

詳知会社

### ■形態

縦帳、紙綴綴こより

### ■発行年代・点数

慶応4年（明治元年〔1868〕）

第1号	5月1日	1点
第2号	5月5日	1点
第3号	5月8日	1点
第4号	5月10日	1点
第5号	5月13日	1点
第6号	5月16日	1点
第7号	5月20日頃	1点
第8号	5月25日	1点
第9号	5月28日	1点

計9点



### 来歴

本資料は、区民山崎家からの寄贈資料です。山崎家は、約300年続く区内屈指の旧家で、現在の当主は9代目にあたります。3代目から旧江古田村丸山組の名主を代々務め、6代目のときに明治維新を迎えました。

山崎家が本資料を入手した経緯は不明ですが、山崎家の古文書のなかには江戸の駒込千駄木に醤油屋を出店していた記録があり、江戸御府内の情報や文物を入手しやすい環境にあったと考えられます。また、山崎家には、慶応4年（1868）の上野戦争後、敗走してきた彰義隊士しょうぎをかくまい、その返礼として刀や徳川なりあき齊昭の書を受け取ったとの言い伝えがあり、これらの事柄が、本資料の入手に關与する可能性も考えられます。

## 資料について

### ①発行時期と体裁

『そよふく風』は、慶応4年（1868）5月1日以降に第11号まで発行された風聞記<sup>ふうぶんき</sup>で、当館ではそのうち第9号までを所蔵しています。

半紙7～8枚綴の一冊物の体裁をなしており、くずし字やルビを用いた文字だけでなく、所々には挿絵も含まれています。

### ②発行

発行所「詳知会社」および発行に携わった人物については詳らかではありませんが、他の文献によれば江戸幕府の洋学教育機関「開成所」に所属する洋学者の手によるものではないかとされています（明治文化研究会編『幕末明治新聞全集第三巻』〈明治文化研究会、1973年〉、北根豊編『日本初期新聞全集15』〈ぺりかん社、1988年〉）。

また、編集元であるとされる小林鼎輔<sup>ていすけ</sup>は、開成所における中心的存在の柳河春三<sup>やながわしゅんざん</sup>とともに仏語教本を作成し、柳河の新聞翻刻業務にも携わった人物であったと伝わります。このことから小林は、日本初の本格的な新聞『中外新聞』<sup>ちゅうがい</sup>創刊者である柳河の影響を大きく受けたと考えられます。実際に、慶応4年（1868）2月に創刊した『中外新聞』にやや遅れるかたちで、5月に『そよふく風』は発行されたのです。

### ③内容

緒言のなかで、詳知会社が「事の軽重と文綴の工拙<sup>ぶんしゅう</sup>とに關せず」に情報を掲載する意志を示しているように、本資料に記載されている内容は実に多種多様です。慶応4年（1868）4月初め頃から5月末頃までの出来事（とりわけ戊辰戦争の戦況）の伝聞や、書状の抜き書き、布告・布達の写など興味深い内容が含まれています。

ここでは、これらの記事のなかからいくつかを紹介します。なお、引用している『そよふく風』内の文章は原文のままです。

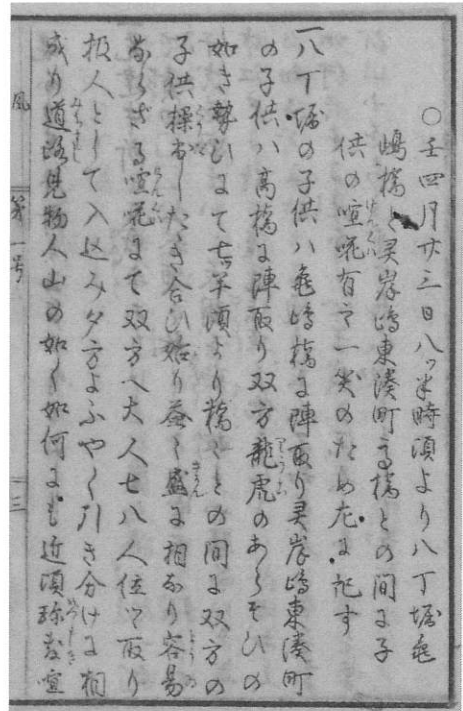
#### イ. 子どもの喧嘩一件（『そよふく風』第1号より）

慶応4年（1868）閏4月23日八時半頃（午後3時頃）、八丁堀・靈岸島<sup>れいがんじま</sup>付近（現：東京都中央区新川二丁目）で子どもの喧嘩が発生したという記事です。

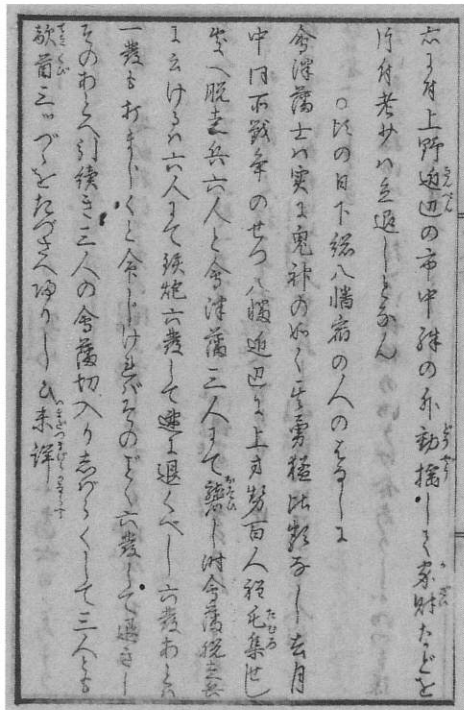
八丁堀の子どもは亀島橋に、靈岸島東湊町の子どもは高橋という橋に陣取り、七時半頃（午後5時頃）より二つの橋の間で「龍虎<sup>りゅうこ</sup>のあらそひの如き勢ひにて」「容易<sup>ようゐ</sup>ならざる喧嘩<sup>けんくわ</sup>」が繰り広げられたようです。どれほど壮絶な喧嘩だったのかまでは分かりませんが、結果的には大人が双方へ7、8人位ずつ仲裁に入り、夕方によりやく引き分けになったとあります。周辺

には見物人が山の如く集まるほど近頃まれ稀に見る珍しき喧嘩であり、こういった喧嘩事は他の場所でも起きているようだと言は締めくくられています。

江戸城が無血開城したのは、この喧嘩一件の1ヶ月ほど前のことで、当時の江戸の町は大きく変わる社会のうねりのなかで揺れ動いていたことでしょう。こうしたなかで起こった世俗的な出来事の一部も『そよふく風』は捉えているのです。



口. 下総八幡宿しもうさやわたの人の話 (『そよふく風』第5号より)



この記事の内容は、慶応4年(1868)閏4月に下総国八幡宿(現:千葉県市川市八幡)近辺で起こった戦闘についてです。これによると、上方勢(新政府軍)100人程の八幡陣営に、脱走兵6人と会津藩兵3人が襲撃し、会津藩兵が手柄をあげたとあります。

明治政府が編纂した史料集『復古外記』の閏4月3日条をみると、この日の明け方、「賊兵果シテ八幡ノ営ヲ襲」って新政府軍は市川に退却したとあり、『そよふく風』の記事は、このときの戦闘のことだと考えられます。

勝者である明治政府側の視点で編まれた『復古外記』では旧幕府方を「賊」としている一方、旧幕府の機関たる開成所の関係者が編集したと考えられる『そよふく風』では、単に「脱走兵」などと表現しています。さらに、記事冒頭部分には会津藩士の勇猛果敢ぶりを「鬼神の如く」「比類なし」と記しているのです。ここにそれぞれの編纂者の旧幕府方に対する姿勢がよくあらわれているといえます。

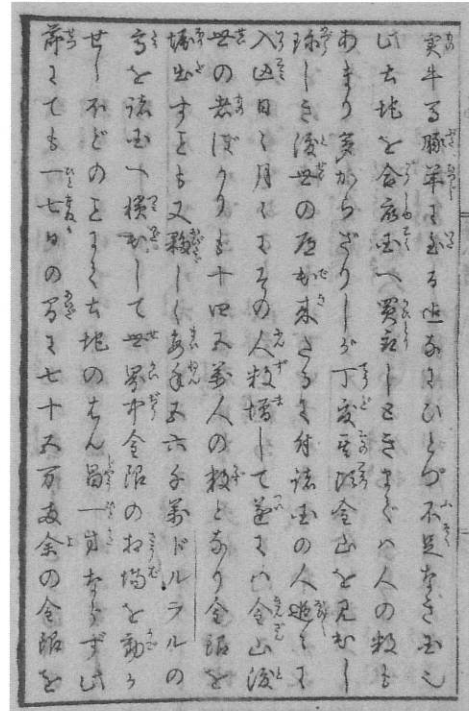
会津藩兵3人が、それぞれ3つの敵兵の首を携えて帰ったという生々しい戦闘の様子を伝えているのも、現地の八幡宿の人から伝え聞いた話ならではのかもしれません。

## ハ. ある洋書の抄出（『そよふく風』第8号）

これは、アメリカ合衆国のカリフォルニア・サンフランシスコの成り立ちの歴史を、ある洋書から抄出したという記事です。

なかでもカリフォルニアの興隆については「<sup>てうどその</sup>丁度其頃<sup>ころ</sup>金山を見出し（中略）遂にハ金山渡世<sup>ついで</sup>の者ばかりも十四、五万人の<sup>かず</sup>数となり（中略）毎年五、六千万ドル<sup>まいねん</sup>ラルの高<sup>たか</sup>を諸国へ積出<sup>つみいだ</sup>して世界中<sup>せかいぢゆう</sup>金銀の相場<sup>さうば</sup>を動か<sup>うご</sup>せしほどのことにて土地<sup>ちか</sup>のはん昌<sup>じやう</sup>一方ならず（中略）一七日<sup>ひとなぬか</sup>の間に七十五万兩<sup>あいだ</sup>余<sup>よ</sup>の金銀を掘出<sup>ほりだ</sup>すといふ」と記されており、ゴールドラッシュに沸き立つ様子が見てとれます。

洋書や外国の新聞などの研究・翻訳を行っていた開成所の関係者は、海外事情に精通した人びとでした。『そよふく風』には国内情勢だけではなく、海外事情や日本人と外国人のやりとりなどの記事も盛り込まれており、広い視野で記事を採録していたことが分かります。



### 登録指定すべき事由

本資料は、江戸周辺の豪農である山崎家が当時の政治的な最新情報を有していたことを示す点で、地域史的な価値が非常に高いといえます。また、幕末の開成所の洋学者らによって発行された日本最初期の新聞のあり方の一端を示すものとして、メディア史・社会史的観点からも重要な資料です。

さらに、ことし平成30年は、慶応4年（明治元年）から150年目という節目の年です。幕末から明治にかけての風俗や社会の動向を克明に伝える本資料に対する注目度は高まり、活用機会は今後もさらに増えることが期待されます。

以上のことから、本資料の継続的な保存管理および研究、活用のために、中野区の登録文化財として後世に残し伝えていく価値は高いものと判断されます。（冨井）

## 中野往來

### 旧上鷺宮村の辻に残る石仏

中野区の北西部は、江戸時代には今川氏の所領で上鷺宮村という村でした。その名の由来は、村の鎮守としてまつられた八幡社の森に鷺が棲みつき、“鷺の宮”“鷺の森”と呼ばれたのが、地名の鷺宮になったといわれています。初めの頃はただ鷺宮村と呼ばれていたのが、開拓が進み、人家が多くなったことから、北側が上鷺宮村、南側が下鷺宮村になったといえます。上鷺宮村は、妙正寺川周辺が田んぼ、それ以外の多くは畑や雑木林で、江戸時代末期頃から長い間、芋、茄子、大根などを栽培する農村地帯でした。

それが大正12年（1923）におきた関東大震災の後、東京市内から多くの人に移り住むようになります。昭和2年（1927）には西武鉄道村山線（現西武新宿線）も開通し、空地や農地が住宅地へと変わっていきました。その後発展を続け現在のような街になっていきますが、旧上鷺宮村地域は、遅くまで広い農地が残されていたことや旧家が多くあることなどから他の地域とは異なる貴重な特徴があります。



新青梅街道の旧道に建つ庚申塔

長い間人々に信仰されてきた石仏が、道路の拡張や土地利用の変化などから、失われたり、神社や寺院などに移設されることの多い中、現在も旧道の辻に建つ石仏がいくつもみられるのです。

区北部を東西に走る新青梅街道と区西部を南北に走る中杉通りの交差点の西側に少しカーブした1本の道があります。これは新青梅街道が江戸道と呼ばれたかつての旧道で、この道を西に向かった鷺宮4-46に笠付庚申塔があります。元禄十年

（1697）二月の建立で、「奉供養庚申二世祈所」の文字と三猿像が彫られています。さらに進んで新青梅街道との交差点で信号を渡った先の上鷺宮2-10に地蔵があります。台石には「寛政三年（1791）鷺宮念仏講」と刻まれています。本体は、戦後、盗難に遭ったため、昭和29年（1954）に再建されたものです。かつてツゲの木がほこのように地蔵を覆っていたことから「つげの木地蔵」と呼ばれています。



元禄十年の庚申塔



御嶽神社と子育て地蔵

また、笠付庚申塔より南西方向に古道を進めば、3体の石仏と御嶽神社がまつられています。鷺宮5-11の辻に上半部が破損した元文三年（1738）の地蔵があります。台石に「奉供養地蔵尊 講中三十六人」「ゑど道 いくさ道」と刻まれ、道しるべの役割も果たしています。隣には、青面金剛と三猿が彫られた延享二年（1745）の庚申塔があります。そして道を隔てた鷺宮5-12には子どもの成長を祈って建てられたといわれ「子育て地蔵」とも呼ばれる宝暦九年（1759）の地蔵があります。その隣にある御嶽神社（鷺宮5-12）通称おいのさま（お狼様）は、明治41年火災盗難除けの神として青梅の御嶽神社に豊作を祈願し、建立された神社です。記念碑には、その起源は、弘化年間に悪疫が流行した際、御嶽山に詣で祈願し、悪疫が退散した、その報恩のために建てられたとあります。（栩木）

# 事業報告

## 各種事業経過

2017年10月～2018年9月

事業名	内 容	期 間
企 画 展	「大正から昭和へ～中野の変遷～」 「おひなさま」 「花・草木を愛でる、育てる」 「夏休み学習展『大むかしの中野』」	9/21～11/12 2/10～3/11 4/27～6/3 7/21～8/31
特 別 展	「楽しみながら学ぶ教養」 「犬の絵馬と動物たち」 「絵葉書に見る東京・中野」 「円了の世界旅行とおみやげ品」	10/31～12/3 1/6～2/9 6/5～7/8 9/1～9/30
夏 休 講 座	体験イベントれきみんサマーフェスタ 「昔の遊び工作」「切り絵ブックカバー」「牛乳パックで日時計作り」「墨流しでオリジナルはがき作り」「オリジナル行燈作り」 「張り子のお面飾り」「むかしのくらし体験」「勾玉作り（3回）」「お楽しみ工作デー（2回）」	7/21～8/31
講 座	古文書講座 講師：笠原綾氏、大友一雄氏 伝統文化体験教室「落語」 講師：春風亭柳若氏	10/21～11/25 12/2～12/16
公 開 事 業	秋季「山崎家茶室書院公開」 春季「山崎家茶室書院公開」	10/1～11/30 4/25～5/7
そ の 他	小学校総合学習見学 24校	

## 埋蔵文化財対応

2017年4月～2018年3月

鷺宮四丁目19番民有地立会 (4/28)	南台五丁目30番民有地立会 (11/24)
南台三丁目43番民有地立会 (4/28)	松が丘二丁目14番民有地立会 (11/30)
南台三丁目43番民有地立会 (5/12)	江古田二丁目13番民有地立会 (12/4)
本町六丁目6番民有地立会 (5/16)	弥生町三丁目34番区立ばんだ公園立会 (12/7)
中野三丁目26番民有地試掘 (5/25)・国庫補助	江古田一丁目3番都有地立会 (12/14)
本町二丁目31番民有地試掘 (6/6)・国庫補助	本町二丁目28番民有地立会 (12/18)
東中野五丁目27番小滝遺跡本調査 (4/6～5/9)	南台一丁目4番民有地立会 (12/19)
沼袋一丁目30番民有地立会 (8/3)	江原町二丁目20番民有地立会 (12/19)
中野区立第十中学校跡地試掘 (8/7～8/10)	江原町一丁目47番民有地立会 (12/19)
中野区立中野神明中学校跡地試掘 (8/14～8/15)	大和町四丁目14番民有地立会 (12/25)
南台三丁目44番民有地試掘 (8/22)	本町二丁目19番民有地立会 (12/27)
松が丘(哲学堂公園内)立会 (8/25)	若宮一丁目13番民有地立会 (12/28)
江古田一丁目25番民有地立会 (8/25)	江古田三丁目3番民有地立会 (1/11)
本町三丁目15番民有地立会 (9/7)	本町五丁目46番民有地立会 (1/15)
弥生町四丁目1番民有地試掘 (9/11)・国庫補助	若宮一丁目13番民有地立会 (1/22)
本町五丁目33番民有地試掘 (9/21)	弥生町三丁目34～35番下水道埋設工事立会 (1/30)
江古田二丁目13番民有地立会 (10/11)	松が丘(哲学堂公園内)確認調査 (1/22～24)
江古田一丁目30番民有地立会 (10/13)	江古田一丁目34番民有地試掘 (1/31)
沼袋一丁目29番民有地試掘 (10/17)・国庫補助	白鷺二丁目29番民有地立会 (2/21)
松が丘二丁目20番民有地立会 (11/14)	若宮二丁目20番民有地立会 (2/28)
南台一丁目4番民有地立会 (11/14)	哲学堂絶対城修復工事立会 (3/8)
弥生町六丁目11番民有地立会 (11/15)	新井三丁目37番(平和の森公園)立会 (3/15・3/19)

## 寄贈資料一覧

2017年10月～2018年9月 敬称略：受入順

資料名	点数	氏名
桃園第二尋常小学校 絵葉書 (大正12～昭和4年)	1	五十嵐 与志子
SPレコード「市民文化レコード」(東京市)	1	加藤 光吉
手習本・教科書	一式	早船 裕子
中野高等無線電信学校等関連資料	一式	大村 春樹
羽子板	2	増田 仁映
裁縫ひな形	一式	西墻 美和子
木目込人形	一式	日高 陽子

◎貴重な資料をありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

資料名	点数	氏名
幼児用かいまき等	6	山際 敦子
哲学堂絵はがき	一式	岡田 正子
金塚	1	土井 憲

発行年月日 2018年10月1日

編集・発行  山崎記念 中野区立歴史民俗資料館

〒165-0022 東京都中野区江古田4-3-4

☎ 03(3319)9221 FAX 03(3319)9119